

地理歴史

【解答】

I・II	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
	b	a	c	a	a
	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
	d	c	d	b	d
	問 11	問 12			
	b	a			
III	問 13	問 14	問 15	問 16	問 17
	b	a	b	d	d
	問 18	問 19	問 20	問 21	問 22
	b	d	a	a	b
	問 23	アジアやアフリカなどの旧植民地の国は、独立後も国際紛争や民族対立による内戦、飢餓といった課題が続いた。特に植民地時代に宗主国の経済発展のために形成された産業のモノカルチャー化（モノカルチャー経済）は経済的自立の障害となり、南（発展途上国）と北（先進工業国）の間の経済格差を固定化する傾向を生んでいた。（150 字）			
IV	問 13	問 14	問 15	問 16	問 17
	d	d	a	a	c
	問 18	問 19	問 20	問 21	問 22
	c	a	b	b	a
	問 23	天皇が定める欽定憲法であり、天皇大権という議会の関与できない大きな権限を天皇が持っていた。特に、陸海軍の統帥権は内閣からも独立していた。天皇主権の下、立法・行政・司法の三権が天皇を補佐するとされたが、政府の権限は強く、各国務大臣は議会ではなく、天皇に対してのみ責任を負うとされた。（140 字）			
V	問 13	問 14	問 15	問 16	問 17
	a	c	c	b	d
	問 18	問 19	問 20	問 21	問 22
	d	d	b	c	a
	問 23	黄河流域の文化的なまとまりは、中華という共通意識を形成し、しだいに拡大していった。中華意識の拡大にともない、中心である中華と周辺の新文化的な夷狄を明確に区別する中華思想も形成された。このように言語・風土の多様性をこえて中華という共通意識が形成され、その際に重要な役割をはたしたのが漢字であった。（147 字）			

【学習アドバイス】

本学の入試は、4科目の中から2科目を選択して受験する形式を採り、試験時間は2科目合わせて100分となっている。各科目にかかる時間配分は1科目につき目安として50分前後である。

2025年度は出題内容が大きく変化し、従来は「日本史B」のみの出題であったが、「地理歴史」へと科目名が変更され、日本史と世界史が融合した「歴史総合」に関する共通問題2題と、「歴史総合」・「日本史探究」・「世界史探究」それぞれに関する選択問題3題という大問の構成に変化した（解答する選択問題は1題）。総解答数は共通問題12問、選択問題11問（1問が論述）の計23問で、2024年度の22問と大差はないが、共通問題が「歴史総合」から出題されるため、この対策をしっかりと行っていないと高得点をとることができない。世界史選択者は近代以降の日本史分野の知識が必要になるが、共通問題で出題されたのは日本の対外関係に関する事項が中心であった。したがって、世界史選択者は日本が関係する事件や条約を学習する際に、当時の日本の首相や社会・経済の状況を補足することで、本学の入試に対応しうる日本史分野の知識がある程度身につくだろう。一方、日本史選択者は近代以降の世界史分野の知識が必要になる。2025年度の入試では共通問題で出題された12問のうち10問が世界史分野に関する設問で、日本史分野を中心に学習してきた受験生は非常に難しく感じたであろう。ヨーロッパ・アジアを中心に政治・経済など様々な分野に関する知識が問われており、そのほとんどが日本とは直接的な関連がない事項であった。したがって、日本史選択者は「歴史総合」の世界史分野の学習が必要不可欠である。細かな知識や地理的な理解を求める問題はないため、「歴史総合」の教科書を精読し、近代以降の世界史分野の基礎知識を着実に身につけておこう。「歴史総合」の対策に時間を要することもふまえ、計画的にバランスよく学習を進めることも大切である。

設問形式は、空欄補充問題（語句・人名の組合せ形式）・年代配列・正誤判定問題・論述問題で構成されている。共通問題・選択問題共に正誤判定問題の出題が多いため、重点的な対策が必要であるといえる。過去問や旧センター試験・大学入学共通テスト対策用の問題集で演習を行い、選択肢の各文を読み、人名・地名・政策といったキーワードに誤りがないか、時代や因果関係は適切かなどを正確に判断できる実践的な力を養おう。また、空欄補充問題も教科書・用語集の範囲内の標準的なものとなっているので、一問一答集などを利用してスムーズに語句・人名等が選べるようにしておこう。

得点に大きな差がつくと考えられるのが論述問題である。2025年度の入試では、各選択問題に150字程度で解答する論述問題が1題ずつ出題された（出題テーマは「南北問題」「大日本帝国憲法」「中華思想」）。2024年度までは120字程度で解答する論述問題が2題出題されており、出題数は減少したものの字数は増加しており、歴史の流れの理解と文章で表現する力を受験生に求める出題方針に変わりはない。論述問題は一朝一夕での対応は難しいので、早めの着手が望ましい。最初は少なめの字数から始め、徐々に150字まで字数を増やしていこう。論述の際には「誰が」「いつ」「どこで」「何をしたか」「どのような結果になったか」「どのような影響を与えたか」という形にならいう述べるとよい。また、どの大問の論述問題も3つのキーワードを用いて説明するよう指示があるため、キーワードをヒントに自分なりにまとめてみよう。キーワードをどのように結び付けて述べるべきかわからない時は、ぜひ教科書の記述を参考にしてほしい。教科書は端的な説明がされている。キーワードとなっている用語の前後の記述を丁寧に読み、教科書の言い回しを取り入れながら文章構成力を伸ばしていこう。そして、最も効果的な論述対策は添削指導である。必ず自分の解答を先生に添削してもらい、どの部分を改善すべきか確認しよう。この繰り返しにより、論述問題に対する不安が自信へとかわり、合格へ大きく近づくことになるだろう。